

らい 来ぶらり 30

ここまで来ている

学習院大学図書館機械化の現状

その最新レポート

図書館の機械化。それは、コンピュータをベースに形成される。ここで、そのイメージを少し具体的に把握してみよう。「資料」の流れに沿って、身をゆだねて欲しい。最初に、「資料」の発注・受入がある。次に、目録業務がある。必然的に、検索が発生する。蔵書管理も存在し、最後に、貸出・予約等のカウンター業務に集結する。これに雑誌が別系統の同一の流れを構成する。これらは、すべて機械化の対象となりうる。むしろ、これらがすべて統合されて真の「図書館情報システム」が構築されると考えてよい。では、現在の機械化はどこまで来たのだろうか。目録作成業務に重点を置いた所までと答えておこう。そう、情報検索を中心として、図書館ははまだ「大いなる西部」を背後に抱えているのだ。

機械化早分かり年表

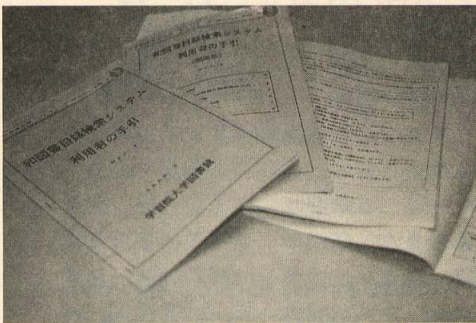
1985-1990

- 1985 機械化元年・機械化研究グループ発足
- 1986 始 動 期・図書問題調査委員会発足、W.Gが機械化推進を検討
・図書問題調査委員会が機械化推進を答申
- 1987 離 陸 期・Utias加入：機械による洋書目録作成を開始
- 1988
・機械化計画大綱案が承認され、予算化が実現
- 1989 上 昇 期・ILIS導入：和書整理に総合図書館システム(ILIS)を導入し、
和書目録の入力を実験的に開始
・学術情報システムに参加：目録所在情報を提供する本邦初の
一大ネットワークへ加入
・冊子体目録作成開始・検索用端末設置
・ILISによる和書目録入力の本稼動開始
- 1990

① 端 末 検 索

開放端末が1台という誠にささやかな試行を開始して早半年。今までのカード目録に代わる新しい検索手段を、どうしたら利用者が理解し、使いこなせるかが一番の悩みの種。

当初は1日1人いたかどうかの端末利用者。ユーザーマニュアル「和図書目録検索システム利用者の手引」(概略版・詳細版)を作成・



利用者の手引最新版

整備して、着実に増えているようだ。

利用者がよく間違うのが、キーワードの入力。違うキーを押すと端末はピーと鳴る。ネバーギブアップ/落ち着いて、画面をよく見て、マニュアル(特に詳細版)をよく読んで、ゆっくりやれば大丈夫。できなければ館員に聞こう。慣れれば便利な端末検索なのだから。

ロコミで利用者が広がっていけば、端末の数も増加しよう。最寄りのパソコンから検索できる日も遠くない。(運用係 入村和彦)

② 和 書 係 の 一 日

端末で見られる和図書の情報作成のお話。

7月X日 朝、いつものように和書係の端末の電源を入れる。大学計算機センター経由で学術情報センター(以下「学情」と端末を接続させた。「今日のデータ入力の一冊目は」と図書を手に取り、学情にその図書のデータ

オンライン情報検索(速報) — 代行検索しています —

図書館はこの4月から『日経ニュース・テレコン』に入り、日経4紙を中心に朝日・毎日などの新聞記事や雑誌記事が検索できるようになりました。新聞記事の速報性としての価値は言うまでもありませんが、資料入手が早くなり、何よりも一つの情報を一定期間を通して網羅的に探せるということは、新聞の縮刷版を一ページずつ繰っていくのに比べて強い味方となります。

このほかには学術情報センターの情報検索サービスも利用出来ます。図書や雑誌の所在情報や書誌情報を得るのにとても有効です。国立国会図書館の国内出版物のデータベースや、ほかの大学図書館の所在情報のデータベースをはじめ、現在でも15種類以上のデータベースが検索可能です。これ



代行検索中の1シーン

からもさらに増えていきます。また、国内にない資料の検索には「Utlas」を利用することが可能です。

しかし、オンライン情報検索は有料でも分単位で課金されるシステムです。残念ながら“だれでも自由に使える”というわけにはいきません。質問や調査の回答を提供するための道具の一つとして今は力を発揮しているところです。

(参考係 甲斐静子)

端末検索体験記

先ごろ、大学図書館に新たに導入された端末検索をおそるおそる試してみた。おそるおそるというのは私が機械にめっぽう弱いからであって、この時もマニュアルを見て途端に頭を抱え込んでしまった。が、いざ使用してみると、なるほど、カードを引くよりよほど簡単な代物である。

カードにはカードの良さもある。それはいうまでもない。しかし毎年増えていく図書のカードを繰り入れていくのはなかなか大変な作業だし、積年の誤差というものも出てくるだろう。こうなると探す方も一苦

労だ。あるはずの本が見つからない、ということだって起こりうる。端末検索の利点はここ、つまり探している本が間違いなく一発で分かることにある。

惜しむらくはユーザーの数が少ないことだ。というのも図書館の機能というものはユーザーの声によって決まるものだから。端末検索は便利ですよ。(仏3 上村文雄)

③ 洋書系のこのごろ

前号でも紹介されていた書誌ユーティリティの一つ、Utlasに参加してコンピュータの目録を作り始めて3年。ようやく軌道に乗ったようだ。3台のIBM端末に向かいトロントのUtlasとオンラインで接続、コマンドを自在に操りヒットしたデータに必要な情報を追加・修正、本学のファイルに取り込む。そして毎週1回、そこから打ち出されたカードが空輸される——ざっとこんな仕組みで整理業務のスピードアップをはかり、同時に、近未来の端末検索に向けてデータベース（現在約2万冊分）を作っているのだが、一方、カードが恐怖の急増加。繰り込む手間も場所も限界だし、アクセスにもハイテクがいる。

さて、現状はまだ機械化「夜明け前」。数年後には、和書と同一システムに華麗にワープする計画である。(洋書係 熊沢夕輝子)



和書系の端末風景

があるか検索する。「あった！」画面に表示された学情データとにらめっこする。書名、著者名etc. すべて同じ。そこで、学情データとその図書の所蔵データを学習院大学図書目録データベースに登録し、同時に学情へも本学の所蔵に登録する。これで1冊めの入力作業終了。入力した内容をプリントアウト。両隣でもいっせいにプリントアウトを始めたので「ジージー」と騒がしい。数冊目、学情にデータがないので新たにデータを作成。画面の書名〇〇など打ち込んでいく。「今日は土曜！学情は正午で終了」今11時58分。まだ入力作業が終わらない。正午になると自動的に学情との接続が切られてしまう。キーを打つ手が震える。11時59分、最後の1字を入力、学情へ登録し接続を終了させる。ジャスト正午、ホット一息ついた。(和書係 小林邦子)



オンライン接続中

今年の顔

新任者紹介欄

ベテラン再登場



法経図書室で3年間仕事をし、今年4月に大学図書館へ戻ってきました。2階奥の事務室で、本の受入、図書・物品の発注、

その他もろもろの雑務をしています。

受入・登録が終わった本は、必要な時すぐ探し出せるようにと分類し、データが入力されるのですが、その間、さまざまな作業と一定の時間が必要となります。登録待ち、入力待ち、ラベル貼り待ち・・・の待ち時間を少しでも縮め、早く利用できるようにと職員は努めています。

私も、書棚にたまらないように、落丁・乱丁の調べもそこそこに済ませ、整理課へ回しています。本当は、ゆっくりと本の装丁を眺めたり、走り読みしたいのですが、ままならぬのが浮世の常・・・。

さて、購入することに決まった本の重複調査（4ヶ所もあるのだ）を早くして、発注しなければ・・・。（受入係 久保田安子）

新人デビュー



4月から私も仲間に入りました。純粋な新顔です。

私の苦手は横文字と数字の羅列。その私の所属は整理課洋書係。仕事

は主にコンピュータ入力・・・ああそれは紛れもない横文字と数字の世界なのでした。無知な私にはここの環境の何もかもが勉強の種です。

ここの環境といえば、緑・緑・緑。植物たちが頑張っている。私は植物が好きですが、それぞれの名前はよく知りません。それでも何となく葉の形や枝の伸び方などが見たくて木を見上げると、高くて先の様子がよく分からない。

そこで私は考えたのです。学問の世界は奥が深い。植物の世界は背が高い。何のこっちゃ。

頭の中は大方こんな風に出てくる人間であります。皆様、どうぞよろしくお願ひ致します。（洋書係 篠原三佳）

編集後記

先日みえたDuke大学の方に、学習院の図書館のロビーがfriendlyだとほめられました。

Duke大学では目録を全部データベース化して、キーワードの組み合わせで検索できるようにしたとのこと。また、10種類のCD-ROM

がフルに活用されているほか、DIALOGなども学生は大体無料で利用できるそうです。

学習院の図書館もロビーと中身と両方を誇りたいのですが、自分その願ひは無理のようです。これも日米文化格差の一例でしょうか。

菜ぶらり No.30 1990年7月1日発行

発行責任者：高本 進 編集委員：鈴木宗一 広瀬淳子

学習院大学図書館 〒171 東京都豊島区目白1-5-1 ☎(986)0221